

# 日本人学校・補習授業校 タマテバコ

トビラを開けたら、いろんなものが見えてきた……



## 台北・台中日本人学校を訪問して

東京学芸大学国際教育センター准教授 見世千賀子

AG5プロジェクトで取り組む5つのテーマのうち、「日本人学校における日本語教育プログラムの開発」について、研究提携校の台北と台中の日本人学校を、本プロジェクトのメンバーで子供の日本語教育を専門にする東京学芸大学国際教育センター菅原雅枝准教授と共に6月末に訪問した際の様子を紹介します。

### 学校環境と入学要件

台北日本人学校（重山史朗校長）は児童生徒数七三九名の大規模校です。まず驚いたのは、台北は治安がよく、学校へ徒歩や地下鉄等の公共交通機関を利用して通学する子供が多いことです。小学校六年生までは保護者の付き添いが必要ですが、中学生になるとひとりでの通学も可能となっています。台中日本人学校松尾功子校長は児童生徒数一三三名の各学年単学級の中規模校です。街の中心部から少し離れたところにあるため、子供たちはスクールバスか保護者の送迎で通学します。

両校とも入学要件は台湾以外の国籍を持つていることです。台湾籍のみの子供は、現地の法律により入学できません。しかし、なかには両親とも台湾籍でも、子供はアメリカやアフリカ諸国等の第三国の国籍を持ち、日本人学校に入学するケースもあります。台湾の保護者が子供を日本人学校で学ばせたい理由には、日本のしつけや生活習慣、多様性に富んだ学習内容といった点への評価と期待があるそうです。

### 日本語指導が必要な子供の増加

台北では昨年八月より、原則とし

て入学希望者は日本語力を問わず編入学可能となっています。その結果、現在特に小学校一、二年生に、日本語指導が必要な子供が多く在籍しています。

台中では、国際結婚家庭の子供と両親ともに台湾籍家庭の子供で、小一〜中三まで各学年それぞれ全体の四〜五割程度を占めています。入学の際に日本語力を問わない代わりに、保護者に対して、日本語学習への協力をお願いしています。台北でも同様ですが、日本語力に問題のない子供もいる一方、他方において母親が台湾籍の場合を中心に家庭での対応が難しいケースも多く、実際には日本語指導は学校の課題となっています。いずれも、家庭で日常的に使用される言語は、中国語、日本語、日本語と中国語の両方、またその他の言語等と家庭によってさまざまです。

### 台北日本人学校の日本語指導体制

一年生は、年齢上の課題でもありますが、先生方は「指示が通りにくく、ちょっとしたけんかも少なくない」と感じています。あるクラスでは、「ふわふわ言葉」（例：すごい、かしてあげる）と「ちくちく言葉」（例：かさがない、ばか）を紙に書いて掲示し、他者の思いをくみ取り、友達とよい関

係が築ける言葉の指導をしています。

台北では一、二年生の希望者を対象に、週一回放課後を利用して三十分間の日本語補習授業が行われています。両学年とも四学級四名の担任がいることから、三段階（上中下）のレベル別に四グループを作り、学年担任が指導をしています。一年生は、コミュニケーション（挨拶等）中心、読むこと（音読）中心、書くこと中心の三つのグループに分けられます。ふだんの学級での様子から、先生方が子供の課題を判断し、所属グループを決めています。一年生で日本語補習を受けている児童は二十四人、国際家庭でも補習の必要がない子や、先生が必要を感じていても保護者が希望せず補習を受けていない子供もいます。参観した三つの



台北日本人学校 日本語補習の様子

補習授業のうち、挨拶中心は六名を対象に「おはよう」や「さようなら」等、長音と文字の表記を学習。音読

中心は二名を対象に国語の教科書で現在学習中の単元の文章を指さしながら、読みの指導が行われていました。最も日本語力の弱いグループでは、二名を対象に十色で塗られた十個の円をプロジェクトで黒板に投影し、先生が「赤」というと、子供は赤色の円をタッチするというゲームを行い、楽しく活動させながら色と呼び方を確認し、その後ワークシートで書く活動を行っていました。

二年生は、約二十名がレベル別に四グループに分かれます。二年生は平成二十二年頃に作成された日本語補習年間計画とワークシートを使用し、全グループが同じ内容で学習を行います。前期十三回、後期十八回で構成され、計画には、それぞれの回の題材名と覚える言葉等が示されており、たとえば第一回は「自己紹介」、覚える言葉は「〜です。よろしくお願います。」となっています。参観した六月二十八日は「濁点のつく五十音」について、「濁点がつく言葉、特別な言葉探し」についてワークシートを使用して濁点がつく五十音を確認したあと、思いつく濁点がつく言葉を書き出したり、「大

きい十こえ〓何か? (大こえ)」といった特別な言葉を確認したりしていました。

### 台中日本人学校の日本語指導体制

台中での日本語指導は、小一〜六年生まで、保護者から希望のある子供を対象に、通常の時間割の中で、週一回四十五分の中国語学習の時間の裏で行っています。全体の時間割や放課後の下校時間等の関係で、現在はそのような対応になっています。国際家庭と台湾家庭の保護者は、四月の段階で中国語学習か日本語学習かを選択することになっています。日本語を選択している子供は各学年に三〜七名います。中学の国語科教員一名が全学年を担当し、国語教科書、ドリル、公文教材、辞書等を利用して、音読、文法、文の作成、語彙を増やす等の指導が、国語の学習

進度に合わせて補習的に行われています。参観した六年生四名の授業では、俳句づくりを「入道雲」をお題に、言葉の意味を辞書で確認しながら創作し、お互いの句からどんな情景が浮かぶか、和やかに意見交換を行っていました。

### 先生方のニーズと今後の方向性

以上のように、両校で取り出しの日本語指導が行われていることは、極めて意義のあることです。在籍クラスでの授業の中では個別に十分に対応できない、発音、文字・表記、語彙の確認、文型・文章の指導等を週一回でも補習的に行うことは、子供の日本語の力を伸ばすうえで有効です。

いずれの学校においても先生方からは、「手探りでやっているこのやり方ではほんとうによいのか」「グループの中で個人差にどのように対応すればよいのか」「日本語指導をする際の見通しを知りたい」「指導法を増やしたい」等の疑問や要望をお聞きしました。こうした疑問や要望に対して、プロジェクトでは、次のような課題を検討していきたいと思えます。

・ 文部科学省(東京外国語大学)で開発された「対話型アセスメント

(DLN)」等の方法を用いた日本語力の実態把握

・ 個別の指導計画の作成  
・ 全体計画の作成

取り出しでの指導については、たとえば台北で使用されているものや子どもの実態や日本語指導の視点から見直し、学校や子供に応じた計画を検討できればと思います。

また、ご紹介したとおり台北・台中では言語的文化的に多様な子供たちに対し、在籍クラスの授業でも日本語指導の視点や背景への配慮が日常的に必要となります。すでに、先生方はタブレットや具体物等を活用して興味関心や理解を促したり、授業中さりげなく声かけをして活動を促したりするなど工夫されています。それを基礎に、在籍学校での日本語指導の視点を取り入れた授業を検討できればと思います。国際結婚家庭の子供や現地の子供たちは、将来日本との懸け橋になってくれる重要な宝です。文部科学省で開発されたJSLカリキュラムの視点や国内の実践を参照して、日本人学校の負担を軽減し役立つ日本語教育プログラムを協働で開発し提案していきたいと考えています。

\* JSLカリキュラム(第二言語としての日本語)  
# JSL Japanese as a Second Language)



台中日本人学校 日本語学習の様子